

■（２０８）高校生の訴えが、町議会、町長を動かした

岩手県大槌町の大槌高校生たちが先日、被災した旧役場庁舎を遺構として残して欲しいと町長に直訴した。町長に意見を伝えたのは、学校での意見交換会と住民対話集会に続き３回目。高校生たちは、広島の実験ドームを訪ねた経験などを踏まえて意見を述べた。

復興が急ピッチで進み、被災したまちの姿は一変しつつある。同時に、震災の痕跡を残す建物などは次々と姿を消す。同町では役場前に災害対策本部を設置したため、当時の町長を含む町職員の４０人が犠牲になった。高台に逃げなかった教訓を後世に残すべきではないか、と保存の方向を探ってきた。それに対し、遺族がつらい記憶を呼び起こすと、７月に初当選した町長が早期解体を訴えた。一気に年度内の解体に向けて動き出そうとしたところ、高校生までもが公に保存を主張。受けた形で、賛否に割れていた町議会も「１年は熟考を」の意見をまとめた。強気だった町長もさすがに年度内解体の断念を表明した。

意見の異なる高校生との対話で、町長がいらつく態度を見せたことも、周囲の反感を招き、流れを変えた。この若者たちが、小さな町の復興に向け、大きな力になりそうだ。（山）